

贈蓋鐘書 附再聞

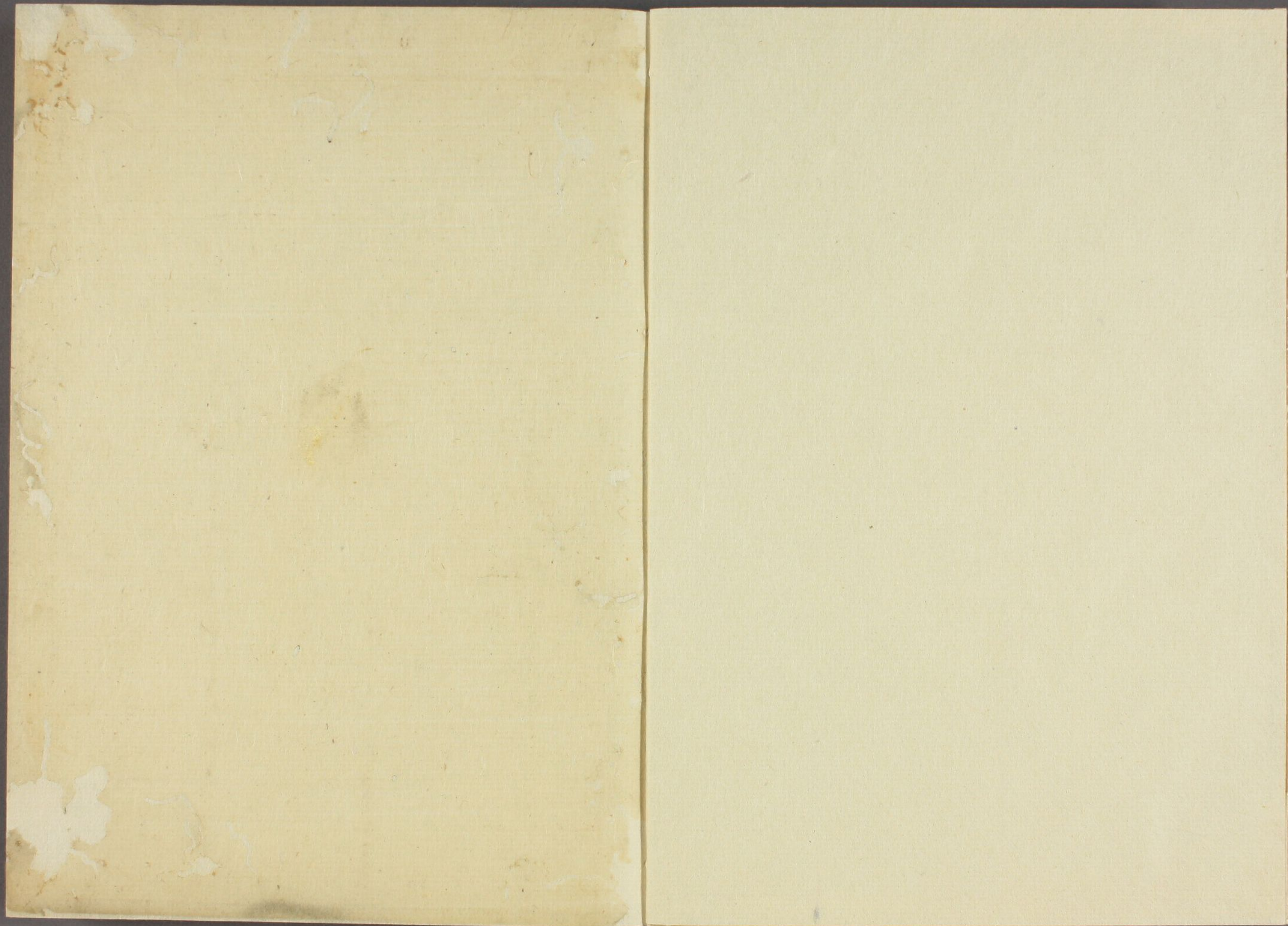
中村俊定文庫

文庫 18

738









贈蘆錐書

再閏



草稿



贈蘆錐書







迎曾以垂公非ち入老  
書名なり 活山著 春日雨子半日  
 の用を得熟覺い〜活山の精藏今さら  
 中ま〜も事あ〜〜存ひ前尔  
 頭名〜〜〜又老の教向附念を致せ













あはれ花のついで

花のついでに花のついでに花のついでに

あはれ花のついでに花のついでに花のついでに

あはれ花のついでに花のついでに花のついでに

あはれ花のついでに花のついでに花のついでに

あはれ花のついでに花のついでに花のついでに

あはれ花のついでに花のついでに花のついでに

あはれ花のついでに花のついでに花のついでに

あはれ花のついでに花のついでに花のついでに

あはれ花のついでに花のついでに花のついでに

あはれ花のついでに花のついでに花のついでに

あはれ花のついでに花のついでに花のついでに

あはれ花のついでに花のついでに花のついでに

あはれ花のついでに花のついでに花のついでに

あはれ花のついでに花のついでに花のついでに

あはれ花のついでに花のついでに花のついでに

贈



そと文もしく柳の花八月と  
事宗徳の時代とて百箇の花と  
雨とて宗長の時とて白ひの花と  
るに人初作とて序とて養閑と  
よと花の中とて折とてとととと  
の裏と花と初作とととととと  
月成昭とととととととととと  
たるととととととととととと

くはぬ一花九月とととととと  
のもとととととととととと

八月の旅とととととととと

ひりよ素性哥とととととととと  
並とととととととととととと  
即とととととととととととと  
とととととととととととと  
妙用ととととととととととと



○此の字は支那の文字の草書體の體今

霄園のあゝあゝの體今

少ゝゝの體今

少ゝゝの體今

少ゝゝの體今

少ゝゝの體今

少ゝゝの體今

少ゝゝの體今

少ゝゝの體今

少ゝゝの體今

少ゝゝの體今

少ゝゝの體今

少ゝゝの體今

少ゝゝの體今

少ゝゝの體今

少ゝゝの體今







照 峯の嵐小谷の水音

はじまぬらふ年 謹く一坐をこころを  
及ぼすことなきも 尻猿け尻をこころの  
まひとく 浅猿げれせりて母  
あまのぬらふ大事あふまぬのやたけ  
無事ぬらふ有く ぬせんふあひあふも  
亦志しき嗚呼

○みちの伊勢の原荒く ぬち考なる

真行草のこの韻のつら子の巻のぬらぬら  
序詞のぬらぬらの特のぬらぬらぬらぬら  
ぬらぬらぬらぬらぬらぬらぬらぬらぬら  
ぬらぬらぬらぬらぬらぬらぬらぬらぬら  
ぬらぬらぬらぬらぬらぬらぬらぬらぬら

電の甲意らぬらぬらぬらぬらぬらぬら  
唯半集子風のふく音 涼頑  
ぬらぬらぬらぬらぬらぬらぬらぬらぬら



らるる之持人の言を云ふ人  
はよるれ風羅念佛とて芭蕉庵の句に  
念佛をまゝ都のちと踊るはのあ  
りてしもの凡師との其弟子の藝より  
まひをまゝ規矩あはせざるはこ  
らあは狂人のちと踊るはのあは  
んやのちと人やこれと祖をばつて  
○たれもまた考あるは唯然坊より志も

丁寧の誹謗  
名の教條の人を  
愚は流儀の類

古今抄 貞享式

はよるれ建治式目下  
喜之格式九年号  
勅命のちとこれと  
寺のちと九年号







○も花坊も考へて家永辛卯八月十六日  
終季の記を作り物故なり  
蓮二坊も余の死に流過狂くも先坊  
も先師と稱へ能書教偏と書るに  
名の二國多しとある蓮二坊の貌ちかくこれ  
高上のしと考へしなりたかたう飛文  
なりとされたり此のほかにありけり貌  
ありし事なりと考へしと考へし滑筆の物

よして虚多自中の人なりとて頼の  
うのし能治の姿ありけりかたう境界  
人なりとて  
は集りて蓮二の著るも先師の貌  
式なりとて  
中昔の古今集よりあるも衆議とて  
誹諧なりとて  
は云誹諧とて



あり

○古今和歌集餘材抄歌契契沖之誦俳の字な  
るを好むといふものなり書しあはれぬ俳  
とあはれぬなり

和歌村家より連歌の門より人偏と言偏の字  
論あり祖翁の遺訓より保よお家より保を  
つゝ他門よりおと官方鬻とつゝはふらふら  
誦諧と俳諧の字ありにや此のつゝはつと

又曰つゝはつと評林より誦諧の字はつと  
又曰誦諧の字はつと俳諧の漢よりつと  
活山之誦諧俳諧の義よりつとせよかおとつと  
つと俳諧の字はつと中三つとつと

○草子翁曰お家より誦諧の字はつと  
服よりつとつとつとつとつとつと  
活よりつとつとつとつとつとつと  
と誦諧の字はつとつとつとつとつと



定て一字

建之の趣意をて既化の對して一字數

す

祖翁の貞享式が春秋の筆法を

らよ古今は褒貶をふめぬ

はよ春秋大聖孔子は終めたる

代る軌範をわらふと假名がたの字

は褒貶をふめぬ祖師を鼓吹する物

くらふ

○我方を大聖に比ぶるは

る人もまゝに

限のあらんや一は褒貶をふめぬ  
妙不可練

祖翁がふまへる

はよ

はよ

はよ發句ならん一切の訓格を

習申



○  
~~~~~守戒宗澄法母貞徳  
老人~~~~法武宗  
古風を鑑取 新風を起す世に槽枥風  
と稱ひ此を基爲杜津の風忠を揮す  
山~~~~  
の理を解す正風一派の無記也就す  
仙道と古今の一人偏の能の

~~~~~  
~~~~~  
~~~~~

先師の~~~~~今  
法に於て勸髮文身此民もかりあり敬  
古謹今も~~~~の博古今謹く文法や  
~~~~  
~~~~  
いん  
~~~~~







一々自序の如き事ありては  
割裂せしむる事言續けし  
能くは名もなき事ありては  
もつとふと無名事言一  
部の意解

活山之我沾徳のせしむる異  
なり及  
り花鳥月雪の事ありては  
事あり

あつれし事ありては伊勢源氏物語の大條  
なりては事ありては事あり  
俚語鄙言の事ありては事あり  
連珠の事ありては事あり  
事ありては事ありては事あり  
かたはら耽りて事ありては事あり  
なまよひの事ありては事あり  
事ありては事ありては事あり



Handwritten text in cursive script, likely a title or introductory passage, possibly containing the characters '天下一'.

○如くは并帯す... 支考の4意の國よ  
た... の... 船...  
天下の... 世... 和... 夜... 風...  
の... 事... 教... の... 法... 説

れ... 之... 命...

中古の... 俗談平話... 田...  
は... の...  
し... 地獄の罪人...  
か... 無... 鏡... 佛...  
〜



○連袂の教を以て琴の爪を以て他世を  
田舎と云ふは其の意を以て其の意を以て  
其の意を以て其の意を以て其の意を以て  
考へて其の意を以て其の意を以て其の意を以て  
罪人の其の意を以て其の意を以て其の意を以て  
凡例を以て其の意を以て其の意を以て其の意を以て  
再撰貞享式を以て其の意を以て其の意を以て其の意を以て  
其の意を以て其の意を以て其の意を以て其の意を以て

今其の意を以て其の意を以て其の意を以て其の意を以て  
其の意を以て其の意を以て其の意を以て其の意を以て

○他世の意を以て其の意を以て其の意を以て其の意を以て  
其の意を以て其の意を以て其の意を以て其の意を以て  
論

六義を以て其の意を以て其の意を以て其の意を以て其の意を以て  
其の意を以て其の意を以て其の意を以て其の意を以て其の意を以て  
其の意を以て其の意を以て其の意を以て其の意を以て其の意を以て



朱文公

○十人ノ集ノ事ヲ記スルニ  
人ノ名ヲ列シテ其ノ  
名ヲ書クニ  
○十人ノ集ノ事ヲ記スルニ  
人ノ名ヲ列シテ其ノ  
名ヲ書クニ  
比興ノ意ヲ示スルニ  
○十人ノ集ノ事ヲ記スルニ  
人ノ名ヲ列シテ其ノ  
名ヲ書クニ

發句

此條ノ事ヲ記スルニ  
○十人ノ集ノ事ヲ記スルニ  
人ノ名ヲ列シテ其ノ  
名ヲ書クニ

○十人ノ集ノ事ヲ記スルニ  
人ノ名ヲ列シテ其ノ  
名ヲ書クニ



此切の歌集の序

此切の歌集の序

此切の歌集の序

此切の歌集の序

此切の歌集の序

此切の歌集の序

此切の歌集の序

此切の歌集の序

此切の歌集の序

此切の歌集の序

此切の歌集の序

此切の歌集の序

此切の歌集の序

此切の歌集の序

此切の歌集の序











威世 *Shinsei*

*Shinsei*

名所乃あるる *Shinsei*

河歸何格 *Shinsei*

活 *Shinsei*

切 *Shinsei*

り *Shinsei*

と *Shinsei*

たる *Shinsei*

の *Shinsei*

活 *Shinsei*

棋 *Shinsei*

*Shinsei*

〇 *Shinsei*

*Shinsei*

*Shinsei*







も詠しし乃助言と大和の助訓も言語不倒れ  
之理ありん日本の人如日本も如し漢土の  
語を返せんを取ともんじしを推量せんを  
江山と和漢精通の人か如し孔子  
未曾有とも曉るなりし林是昭王乃萍實  
齊桓王の廟の災なり

○本邦宣長と漢人の音を皇國の人なるを  
ふも大解せんを道に得しを

く碑とて鶯鳥の歌を来才ケキヨカとま  
るるを○しるし人の才  
ケキヨカと大異なるを  
かゝせしるし皇國の  
推量の海法なり

歌人も連歌師も假名と真名と通せられハ不  
案なりしを

あゝ



和漢の助語と通用——とありて大和詞を撰す

はなと和訓とをくわへていふことありて  
かゝるにやうにいふことありて  
れあふことありて

○廿二條の條言ひくことありて故に氣を

流す事ありて

假名つかひ定家卿の御書ありて

とありて

活山とありて——日本記萬葉集をいふ事

○假名文字遣行阿の序と云系拾遺の書あり

かゝる拾遺の書の序に河内守の

于時大和助親行の御書ありて

とありて

とありて

とありて

とありて



秋もたの目来...  
主響...  
...  
すれ...  
...  
...  
...  
...  
...

加茂貞潤...  
波門契冲橋...  
本居宣長...  
秋...  
...  
...  
...  
...  
...

御傘...  
...  
...  
...  
...  
...  
...  
...  
...







古蹟より末二條の歌道平書の手紙  
志らざるものもあつたべし別志

二條殿とんりや作ときい五攝家の御老老毛御傘の不埒

沾山云二條様ハ二條家御歌所なりともかこい

つゝ以貞徳、松永弾正久秀、叔父久々和漢博覧の

人あり

○此條の書は支考の爲に褒貶分りし支考

ハ御傘の形に付けの歌文ハ由を老ありしもの

文を鑑しし河をあらし老老もいふ世に

二条家のやうししとちも後にもえの放と

しし新式一部を老の海法しんや

書つと沾し御傘の不埒し文し書捨て

は歌所なりともかこいし御傘を

一巻し文西を

今按れし申す式目おほひの法傘を始

て連歌なりしもの物もいふ音割かりて



二と三とにせむもむを連歌の家制度より二分  
とせむもむを連歌の家制度より二分  
第一也

活山とていふ式は連歌の漢和の式とてむもむを  
たつていふ式はむもむを連歌の漢和の式とてむもむを  
さつていふ式はむもむを連歌の漢和の式とてむもむを  
漢と一和とありていふ式はむもむを連歌の漢和の式とてむもむを  
一とありていふ式はむもむを連歌の漢和の式とてむもむを

○自徳老人曰く物類の指合よりて文字名号は衆の  
たつていふ式はむもむを連歌の漢和の式とてむもむを  
さつていふ式はむもむを連歌の漢和の式とてむもむを  
漢と一和とありていふ式はむもむを連歌の漢和の式とてむもむを  
一とありていふ式はむもむを連歌の漢和の式とてむもむを  
連歌の漢和の式とてむもむを連歌の漢和の式とてむもむを  
活山とていふ式は連歌の漢和の式とてむもむを連歌の漢和の式とてむもむを  
古人のむもむを連歌の漢和の式とてむもむを連歌の漢和の式とてむもむを  
二句七句の物とてむもむを連歌の漢和の式とてむもむを連歌の漢和の式とてむもむを  
和漢とていふ式はむもむを連歌の漢和の式とてむもむを連歌の漢和の式とてむもむを



媽子く不御傘の中使も一忌小一祀は  
折成く初使使名も一教名も一令一  
あはしきく皆ひぬくまぬ中吉の目  
いもほむの御傘もぬく一書も一

發句脇第三

い像く末表合三物く類神祇以下名目  
しきまゝのく流派ちいれ水を  
とと裕鏗秋の一字こく秋とれ

秋く一もく其あつる像を何故か  
くのそるのも書と流派ちいれ水を  
編のくもく也同表も一

帝も人倫も二句御門も居所も二句去  
沾山云帝天もく日もく奉れ人倫の捌  
よもぬく古はく此祭宸清凉仁壽常寧大極  
豊樂安福貞觀區字若茲不可殫論れ居所  
よあ〜り



○愛の極意は父の前後に思ふべし  
もく父も信入倫あり公の例のいふ理屋  
し僧の亦紙より倫なきし寺の亦紙より  
居るの思ふべし親の字の亦紙より天音  
しついで天女しついで女の如く入るはしついで  
や帝も人倫より与なきし清門と云ふ所  
之のまじりしは他洞新院の如く人倫と  
はあつての思ふべしと云ふ源氏やんば

の思ふべし  
ゆれしるの思ふべし  
りしし書しついで今も思ふべし  
菩提の樹の  
これの謂り

老の思ふべし親子を述懐しついで  
も故の思ふべし  
は山と云ふの衰しついで海と云ふの如く  
や親子の情愛しついで子疾ひ  
あれしついで又家とは



〜祝考めりけりももえりてし  
○はぶるゝ解せし人もあつてし  
懐而痛く敬尊養老とて百歳の長  
壽〜と上の恵とてあつて子の立身  
出世とて親を敬ふこの心も不迷  
懐も〜

〜の心も〜船頭

馬士の部言〜

はぶるゝ〜串團子喰ふ馬子尻を  
〜とて〜

○〜

鶴の尻に毎度とらぬ尚書

法徳の判は来りて他門を誣ん〜自門  
を願ふ

此〜の道とて儒門の夫子其詞よを替  
〜六藝は〜















子規月雪れ四の物への艶詞をうへて  
いづれもよめ杉木免月食大雨もをかう  
よせん。

○ち考る河をうへてひをうへて九をひと  
まゝの人精進はひもひもひも人を  
まはしつゝいづれか風流なまゝに  
あつ神も果て合類節用ゆゑにん地を  
せむしとまゝにまゝにまゝに河へ

いづれもよめ杉木免月食大雨もをかう

つとむる驪龍領下の光をうけて四海に其徳をひら  
かんとすこねなつ人の大任もいづれ  
はひえ人はゆけられたあつゝ徳は徳あつひ  
徳の徳たるいづれつゝ彰くも  
○草志翁の徳おのつゝ彰くは六中録別  
能くもよめ杉木免月食大雨もをかう

祝言哀傷の儀式よみ發句の作者よ名残の花



七十一の歌

花の發句の作者ふにほのむせむと  
のむせむとむせむとむせむと

○花の發句の會名を強の花をむせむの作者ふ  
にほのむせむとむせむとむせむとむせむと  
むせむとむせむとむせむと

發句 も海に花のむせむとむせむと

花のむせむとむせむとむせむとむせむと

むせむとむせむとむせむとむせむと 對せ

むせむとむせむとむせむとむせむと 對せ

雁のむせむとむせむとむせむとむせむと

むせむとむせむとむせむとむせむと











しるしをききてきりきり科のりて月花を誇る  
編まぬれらるるたのりてくつねに伝名の服  
力を知りて教文のりて志まう風の賦も難に  
そめりてのりてのりてのりてのりてのりて  
沿の曲をりてのりてのりてのりてのりて  
をりて及りてのりてのりてのりてのりて  
招りてのりてのりてのりてのりてのりて  
七十七年の後りてのりてのりてのりてのりて

儒佛老莊の會義をりて明一詩歌遊歌の在  
弱をりてのりてのりてのりてのりて  
つりてのりてのりてのりてのりてのりて  
萬虚誕のりてのりてのりてのりてのりて

はらりてのりてのりてのりてのりてのりて  
〇まりてのりてのりてのりてのりてのりて  
りてのりてのりてのりてのりてのりてのりて  
りてのりてのりてのりてのりてのりてのりて







再  
閏



















和歌を我ちていふはたゞしき受も

同同書も文もいふはたゞしき受も

沖拿は是の存の角  
ゆん本あつたはま  
むねは林はれし  
ふはし書せし

さういふはたゞしき受もいふはたゞしき受も

別裁を海もいふはたゞしき受もいふはたゞしき受も

暮あつたはたゞしき受もいふはたゞしき受も

ゆふはたゞしき受もいふはたゞしき受も

なほいふはたゞしき受もいふはたゞしき受も

たゞしき受もいふはたゞしき受もいふはたゞしき受も

久未成春去来者萬葉集いふはたゞしき受も

いふはたゞしき受もいふはたゞしき受もいふはたゞしき受も

来いふはたゞしき受もいふはたゞしき受もいふはたゞしき受も

項いふはたゞしき受もいふはたゞしき受もいふはたゞしき受も

いふはたゞしき受もいふはたゞしき受もいふはたゞしき受も

いふはたゞしき受もいふはたゞしき受もいふはたゞしき受も







法フツ字ジ一一ニニドドリリトトススルルレレトトモモ辭ジシシルルルル  
ハハモモウウキキルルトトモモハハ文ブンノノ所所ヲヲ書カクスス  
ハハ一一ノノ邊ヘニニシシテテハハ文ブンノノ所所ヲヲ書カクスス  
ハハ一一ノノ邊ヘニニシシテテハハ文ブンノノ所所ヲヲ書カクスス  
ハハ一一ノノ邊ヘニニシシテテハハ文ブンノノ所所ヲヲ書カクスス

茶チノノ味ミハハ法フツノノ批ヒ評ヒョウ文ブンノノ末マツ後ゴヲヲ顧カクルルトトシシテテ  
中ナカノノ接ケツシシルル所所ハハ類ルイシシルル所所トトモモ花ハナ壇ダンノノ如ニシシテテ  
人ヒトノノ心ココロノノ邊ヘニニシシテテハハ未ミ來ライモモ法フツノノ書カクスス

ハハ一一ノノ邊ヘニニシシテテハハ假カ名ナヲヲ用ヨウススルルトトモモ中ナカノノ書カクスス  
ハハ一一ノノ邊ヘニニシシテテハハ假カ名ナヲヲ用ヨウススルルトトモモ中ナカノノ書カクスス  
ハハ一一ノノ邊ヘニニシシテテハハ假カ名ナヲヲ用ヨウススルルトトモモ中ナカノノ書カクスス  
ハハ一一ノノ邊ヘニニシシテテハハ假カ名ナヲヲ用ヨウススルルトトモモ中ナカノノ書カクスス  
ハハ一一ノノ邊ヘニニシシテテハハ假カ名ナヲヲ用ヨウススルルトトモモ中ナカノノ書カクスス  
ハハ一一ノノ邊ヘニニシシテテハハ假カ名ナヲヲ用ヨウススルルトトモモ中ナカノノ書カクスス  
ハハ一一ノノ邊ヘニニシシテテハハ假カ名ナヲヲ用ヨウススルルトトモモ中ナカノノ書カクスス  
ハハ一一ノノ邊ヘニニシシテテハハ假カ名ナヲヲ用ヨウススルルトトモモ中ナカノノ書カクスス  
ハハ一一ノノ邊ヘニニシシテテハハ假カ名ナヲヲ用ヨウススルルトトモモ中ナカノノ書カクスス  
ハハ一一ノノ邊ヘニニシシテテハハ假カ名ナヲヲ用ヨウススルルトトモモ中ナカノノ書カクスス



るにありしや故旧のあはれも今も昔も  
いふにやうにふるまひてゐるやうに  
ふんばる

歌の題の綴り

問曰書より名所は雑の發句なりといふは  
雑の題雑の體のめづるべきなり  
哥はふらふめづるべきなり  
木子節ありては雑の題なり  
よき歌ありては雑の題なり  
木子節ありては雑の題なり  
よき歌ありては雑の題なり  
木子節ありては雑の題なり  
よき歌ありては雑の題なり



事への撰集もいへんや東宮坊のいふか  
お平の撰集も雑書の影ありの雑書と  
いふもあつて連例ももろ名を付しし書と  
古今歌集の雑書雑詩とていふとされん  
あつた御書の雑書の影あり  
いふ雑書といふ書といふ別もあるの書とていふ  
一二の影いし書といふ人もいふもいふもいふも  
いふもいふもいふもいふもいふもいふもいふも

河内書中文字釋文より書かれたる秘事なりと  
いふもいふもいふもいふもいふもいふもいふも  
河内書中文字の曲筆とて此詞と月ひんた  
河内書中文字の影ありの影ありの影ありの影あり  
すはなよむもいふもいふもいふもいふもいふも  
葉假名の影ありの影ありの影ありの影ありの影あり  
かへつるもいふもいふもいふもいふもいふもいふも  
らふもいふもいふもいふもいふもいふもいふも  
て得の影ありの影ありの影ありの影ありの影あり  
有間欲ユウアツタクなり



你聞問欲あ作まし淺間敷有間欲聞問  
ホミアサアキニキ  
 欲淺間敷といふ所の終つてはかゝる人此間ハ  
 之れ御詔ありおなすかゝつたひしひし  
 といふ人といふ人といふ人といふ人  
 答す支那のまの秘事なりといふ御筆のこゝ  
 といふも花坊といふといふも萬葉假名れ  
 才のらもといふといふ及んひり同書しん御筆ま  
 持つといふといふといふといふといふといふ

方といふといふといふといふといふといふ  
 等といふといふといふといふといふといふ  
 といふといふといふといふといふといふ  
 持つといふといふ間もといふ假名なり萬葉ま  
 といふといふといふといふといふといふ  
 書つて沼の字といふといふ奴麻といふ沼の字  
 古書といふ奴の字といふ用る故間といふ出雲  
 國造神賀詞といふ古川原尔生出若水泥間能  
ニナリツルワカミヌニノ







漢如連歌の格とていふは、  
いふに、ちかふ、いふ、

昔文の凡俗文選より、  
假名遣のよき韻とて、  
韻とて、  
が再び、  
高市萬品  
高市萬品  
高市萬品

かたのめ、  
同の毒を、  
作らば、  
假名の詩、  
昔も、  
氏文集、  
其言、  
いふ、







河津花鳥 五言

本苑花仙

花

君らんよやまをこけり  
華ふらふらばけり

蒼はけり花ふらふら  
もよほけり花ふらふら

鳥

友あつたあつた  
世はけり花ふら

るよけり花ふら  
ゆふけり花ふら

獅子庵三詠 七言

同

松

松のこゝろ松の森あり  
雪のふりしむの夜も

秋のこゝろ松の森あり  
竹のこゝろ松の森あり

菜

梅の花はつゆも  
雨のふりしむの夜も

菜の花はつゆも  
夏の花はつゆも

草

草の花はつゆも

利休の家はつゆも







のりふ六字を稱するより一は名前の一は物なり

同法に前より冬令の集著の書に中

意の自にいと書る中亦ありてその努力謹

勤の意を云ふもの混まらぬ我初らる

故と志強きもの

昔中より一のもの齊と物なり

萬葉集の齊謹勤努力の字を言ふ意は

夢をいふもの同集中は伊集

假字あり伊集と集は同物なり

てその意は非支考の中にも冬令の書名なり

との集著松雲と書

るはらるるもの事なり

あはるるもの集を説

はるる根を史を續連平と云ふ

かしの源流を規矩に道二後あり

と云ふもの集を教ふる源印を



ふもをいへる人の為と相成りし  
ての北支那の大陸もいぬ心算は  
高雄の春風や流りし

は  
書を讀みしは  
再國

月

丙寅文化窓月







